

学位論文の要旨

論文題目

敦煌文献における学士郎題識の研究

A Study of Scholars' Colophons in Dunhuang Manuscripts

広島大学大学院総合科学研究科

総合科学専攻

学生番号 D186993

氏名 玉素甫 艾沙

論文の要旨

前世紀の初頭の敦煌文献の発見により、「敦煌学」という学問分野が形成され、整理研究作業が始められた。草創期以降、敦煌学研究は常に資料整理が中心に据えられてきたが、文献整理も一定の段階を迎え、徐々に文献本体の内容研究から地域社会文化への研究も盛んになりつつある。このような新たな研究背景のもと、本研究では敦煌文献の「題識」に焦点を当て、伝世文献には見られない「学士郎」という存在を中心に、その活動の実態や社会的立場などを検討する。

第一章では、題識資料の整理および研究の学術史とその問題点について検討する。第一節と第二節では、学術史の回顧を通じて、題識資料が整理から研究へと発展し、さらに専門的な展開が進んだ過程を紹介する。この中で、先行研究が題識資料に注目しているにもかかわらず、用語、定義、範囲において定説が確立しておらず、異なる術語が使用されているという問題点を提起する。第三節の第一部では、先行研究の用語を踏まえ、『邈真贊』文書を整理し、頻繁に使用される「題記」という用語が、実際には多くの場合「擬題」として用いられ、特に絹画などでは文字テキストを転写する行為を指していることを明らかにする。「題識」という用語は、「題記」と「識語」の意味を含むと同時に、標識としての意味も持ち、写本、造像、絵画などに付されるさまざまな記載を包括できるため、本研究より適切な用語として定義するべきであるとする。第二部では、付録部分として整理した題識について、文献の情報、人物名、呼称、紀年、所属などを簡潔に説明し、それらを一覧表としてまとめる。

第二章では、題識に記載された「紀年」、「称呼」、「氏名」に焦点を当て、学士郎の身分に注目して論述する。第一節では、詳細な整理に基づき、明確な呼称がある題識をもとに、学士郎および関連する呼称を整理・分析する。「学生」という呼称は、官学が廃止されたとされる吐蕃統治時期から曹氏帰義軍時期に至るまで継続的に使用されている。一方で、「学士郎」の呼称は、「学士」、「学郎」とともに張氏帰義軍の中後期に登場し、曹氏帰義軍時期には主要な呼称となった。その正確な開始時間は不明であるが、本研究の整理により、各呼称の時代背景が明らかになった。第二節

では、各種呼称を用いた人物を分析し、帰義軍時代の敦煌社会が張、索、李、陰などの大姓氏族を中心としていた一方で、「学生」、「学士」の呼称を持つ令狐、翟などの姓氏が「学郎」、「学士郎」には見られなくなったことを指摘する。また、「学郎」、「学士郎」の呼称を持つ人物には、「学生」、「学士」の呼称に見られない曹、薛などの姓氏が現れている。この発見を基に、いくつかの氏族を簡単に分析し、曹氏帰義軍時代の敦煌においては、胡姓氏族を代表とする新興氏族が出現し、特殊な呼称として「学士郎」が用いられた可能性が考えられる。

第三章では、題識に含まれる「読」、「誦」、「書」、「写」などの情報に焦点を当て、学士郎の行為について検討する。第一節では、敦煌文献における「読」と「誦」の使い分けに注目し、その意味を明確にするため、三件の『誦経歴』文書を用いて、基礎教育が主に誦に重きを置いているという見解を提示する。また、読誦の応用という視点から、題識に見られる「居」、「札」、「念」、「聴」などの用語の意味を分析し、読誦を中心とする各行為の関連性とその重要性を明らかにする。第二節では、敦煌文献の題識における「書」と「写」の使い分け現象に注目し、学界で関心を集めている学郎詩の「側書」の問題を出発点として、より多くの題識資料と所有権を示す内容を結びつけて分析する。写本時代における「書」と「写」の違いは、単なる審美や名誉の向上にとどまらず、実用性にあることを主張する。第三節では、書法の「筆勢」の習得と応用という視点から、敦煌文献における習字とその編纂要因を再考察し、各種習字資料と題識における内容と形態の共通点を分析する。習字を含む各種題識が、学士郎などの人物による筆勢の習得と応用に関連しているという見解を提示し、実用性を備えた「書」が題識資料全体の性質を理解するためのキーポイントであるとする。

第四章では、学士郎の役割について考察を行った。第一節では、題識に見られる「寺院」、「坊巷」、「押衙」、「孔目」などの所属に関する情報を分析する。張氏帰義軍の職官制度の地域特性や、曹氏帰義軍時代に見られる兼官帯職の現象を考慮し、先行研究で「寺学」や「私学」とされている教育機関の状況と照らし合わせながら、「学官兼称」の題識資料における学士郎の呼称の出現に注目する。これにより、「学士郎」が帰義軍治下のさまざまな社会的役割を果たしていた可能性を提案する。第二節では、題識に見られる『難月文』と類似する文書内容に着目し、生育祈願に関する各種テキストを収集・整理する。この分析により、応用文書と題識が同じ草稿性質を持ち、テキストが現場の状況に応じて内容、構造、テーマ、形式の連結や転換を必要とすることを明らかにする。各種文書テキスト間の連結と転換のキーポイントは書写者であり、これが「学士郎」における重要な役割であると強調する。

付録部分の『敦煌文献学士郎題識集録』は、写本、造像、絵画など各種文献に見られる「学士郎」および関連呼称に関する題識資料を収集、整理するものである。呼称に基づく先行整理の概況、題名、写本の状況、本体内容の録文、画像と題識の録文、

先行研究の備考情報（個別問題の研究史）、本文で新たに補足する備考情報（研究メモと新発見の課題）を含め、画像の照合、修正、および補足を行い、多くの資料と細部を追加し拡充する。先行整理と研究に続く、このような題識資料の再整理であり、旧資料から新たな課題を発見し、さまざまな内容と視点の研究に活用されることを期待するものである。